



2026年度
第7号

体育市民連帯 ニュースレター

大韓民国スポーツの

根本的变化を

皆さんと共に

作って行きたいです

体育市民連帯と共に

していただけませんか？

1
'余ソジョン保留'に
急いでいたのか…
国家代表の評価点数
「事後操作」の兆候



2
最高レベルの内部抗争で
全身がポロポロに
ジャイアンツ野球団が
失った5つのこと



3
選手も、施設も
不足しています
大田の冬季スポーツの
構造的限界が明らかに



4
'ソウルドーム'を
建設すべきだ”
東大門の文化・体育機能
の復元を主張



5
スポーツ 最高裁判所さえ
ウクライナ追悼
オリンピックでは
認められない



*

01 日曜新聞 2026.2.9

‘余ソジョン保留’に急いでいたのか
…余ホンチョル、国家代表の評価点数「事後操作」の兆候



体操協会の競技力向上委員会の録音記録を入手しました…

イ・ヨンシク専務「メダルの可能性などを臨機応変に数値化して提出しよう」

大韓体操協会競技力向上委員会が、国家代表選考戦の評価点数表を急遽作成・改ざんした疑いが浮上した。余ソジョンを含む男女の器械体操国家代表6名について、韓国体育会が「承認保留」を決定した後のことだった。会議の録音記録などによると、余ホンチョル大韓体操協会専務理事が「臨機応変」を強調し、評価点数表の操作を主導したとされている。

『『そのまま選ばれました』と言えば、ただ自分たち（大韓体育会）はこれ（総括評価点数表）だけを見れば『そうなんだな』と流してしまうことができます…（省略）いいえ、これは今、臨機応変に点数をつけて設定し、今提出しようということです。今…（省略）これはただの臨機応変で、私たちが数値化して提出しようということであって、これを（規定として）しようということではありません。』

-2025年5月23日、慶南マサン室内体育館、韓国体操協会競技力向上委員会の余ホンチョル専務理事の発言要約

「体操レジェンド」余ホンチョル大韓体操協会専務は、娘の余ソジョンが器械体操の国家代表に選ばれる過程で決裁権を行使し、利益相反の論争に巻き込まれたことがある。余ホンチョル専務は、国家代表選考の詳細基準の変更や国家代表選考などの主要な行政手続きで決定権を行使したことが確認された。これは「パパチャンス論争」へと発展した。監査院や国民権益委員会などは、該当案件の調査に着手している。2025年3月29日、韓国体操協会競技力向上委員会は、余ホンチョル専務が出席した状態で会議を開き、国家代表選考の詳細基準の変更を決定した。2024年9月に廃止されたランキングポイント制度を再導入すると同時に、「メダル獲得の可能性」を国家代表選考に反映させる方策が新基準に盛り込まれた。その結果、国家代表選考会で30人中29位だった余ソジョンが国家代表に選ばれることができました（関連記事 [独占] お父さんが関与したのか？ ‘体操レジェンド’ 余ホンチョルの利益相反の論争。

器械体操の国家代表選考は2025年4月25日と26日の2日間にわたって行われた。4月27日、韓国体操協会は第2回競技力向上委員会を開催し、余ソジョンを含む男女器械体操代表選手の選考名簿を決定した。当日の会議には余ホンチョル専務は出席しなかった。

大韓体育会は、大韓体操協会が決議した国家代表名簿の承認を保留した。ランキングポイントとメダル獲得の可能性で高評価を受け、国家代表に選出された男女計6名（男性3名、女性3名）の承認が保留された。余ソジョンも承認保留の対象だった。

2025年5月14日、韓国体育会は公文書を通じて「承認保留選手に関する客観的選考根拠資料（選考基準の充足を証明する資料）」と「国家代表選手選考異議申請制度運営資料」の補完を求めた。大韓体育会でも大韓体操協会の国家代表選考基準の客観性を問題視したと解釈される。

大韓体操協会は競技力向上委員会を再び招集した。ジン・ジョンオ国民の力議員室が大韓体育会と大韓体操協会から提出させた資料によると、2025年5月23日、慶南馬山室内体育館で大韓体操協会第4回競技力向上委員会が開催された。当日の会議審議事項第4号は「2025年度女子体操国家代表選手評価の件」であった。審議の理由は大韓体育会からの補足資料の要請であった。

審議事項の推進方針としては、「成績順6名を除いたランキングポイント獲得選手を対象に委員会評価を実施し、客観的なデータを算出する」ことが明記された。評価の範囲は、ランキングポイント、メダル獲得の可能性、国家代表指導者の意見を反映した評価であった。ランキングポイント50点、メダル獲得可能性30点、指導者意見20点を合算し、総得点100点で選手を選出する基本案を巡って会議が開かれた。

大韓体操協会競技力向上委員会は、評価点数をランキングポイント40点、メダル獲得可能性40点、国家代表指導者の意見20点に修正反映した評価点数を（大韓体育会に）提出することを決議した。メダルの可能性や指導者の意見評価項目については、スタートスコアなどを競技力向上委員会で決定し評価することを決議した。

体操界のある関係者は「メダルの可能性や国家代表指導者の意見は依然として抽象的な基準であり、数値化した点数だけを適用して客観性を確保しようという発想だった」とし、「メダルの可能性と指導者の意見の点数がどのように評価されるのかという疑問は依然として残っている」と述べた。

ジン・ジョンオ国民の力議員室が大韓体操協会から受領した『女子器械体操総合評価点数表』によると、余ソジョンはランキングポイント（40点）と指導者意見（20点）で満点を獲得した。余ソジョンは「メダル可能性」の点数でも35.71点を獲得した。総得点は95.71点で、審査対象選手16名の中で1位を記録した。

ジン・ジョンオ国民の力議員室が大韓体操協会から提出された「第4回競技力向上委員会会議の録音記録」によると、余ホン Chol 専務はこの日、選手選考に関して意見を積極的に述べたとされている。余ホン Chol 専務は「メダルの可能性」スコア項目について「スタートスコア（技術基本スコア）」を基準にしようとして提案した。問題はその後だった。余ホン Chol 専務は「少年体育大会が終わった後、副会長と選手村に入って（国家代表選考）を承認してもらった後から、私たちが補完して（選考基準を）客観化するつもりだ」と話し、「スタートスコアや資料を作ってほしい」と言った。選考会以降、選手評価に関する基準を整備した状況である。

この会議で余ホン Chol 専務は「そこ（大韓体育会）でも数値化されたものを書けないので、数値化されたものだけをまず渡せば通過させるということだ」とし、「50、30、20（評価範囲）このままでも入れて『このまま選びました』と言えば、ただ自分（大韓体育会）はこれ（総括評価点数表）だけ見れば『そうなんだな』と流すことができる」と強調した。

競技力向上委員長が点数評価の方法について尋ねると、余ホン Chol 専務は「いいえ、これは今、臨機応変に点数を付けて設定し、今提出しようということだ。今」とし、「今（男女それぞれ）3人、6人のためにやっているのだから、今しようということだ」と述べた。

余ホンチョル専務は「これは規定ではない」としながらも、「このまま点数化して選手たちや（大韓）体育会に送るつもりだ」と述べた。余ホンチョル専務は「自分たち（大韓体育会）も『こんな風に選ばれたんだな』と思ったら『オーケー、入ってこい』、これを今やるために臨機応変に今私たちが作ったものだ」と付け加えた。

競技力向上委員長が再度「点数をどうにかして与えなければならないのではないかと尋ねると、余ホンチョル専務はこう答えた。

“やめて。私が、私が整理を決めるから。まず、今の評価表のランキングポイントとメダルの可能性がありますよね。これをスコアを50、30、20にするのか。このまま、今私たちは入れるつもりです。ただ入れるつもりですが、この得点表の点数を50、30、20にするのか、それとも40、20、20にするのか、それを少し議論してください。”

余ホンチョル専務は話を続けた。

“点数は今回だけのもので、これだけ私たちが臨機応変にやるもので、これを（規定として）やろうというわけではありません。（省略）今、男性もそうっておきますが、これはただ臨機応変に私たちが数値化して提出しようというもので、これを（規定として）やろうというわけではありません。次に選ぶのは私たちが少し客観化していくことなので、これ（総括評価点数表）以外には関係ないのです。”

会議の終わりに、余ホンチョル専務は「体育会の仕事が突然思い出されて、自分たちの都合でこう言っているので、怒って声が少し高くなった」とし、「本人（大韓体育会）も早く入れてほしいが、それが数値化・客観化されていないため、自分たちも不安なのだ」と述べた。

余ホンチョル専務は「監査が入ってくると、これをどう評価するのか、それが理由だ」とし、「私たちが50点でも40点でも30点でも、数値を入れてくれれば、自分たち（大韓体育会）も『こうやって選ばれましたか』と言って（国家代表選手を選手村に）入れてくれるということだ」と述べた。

余ホンチョル専務は「競技力向上委員長のように、私ももどかしい正直に言うと、“選手ごとに特性があるのに、それを理由にあれこれ言おうとする傾向がある”と述べた。すると、韓国体操協会のC副会長は「入村者を除いた残りの選手を対象に点数を取れば、ある程度の数値が出ると思う」と述べた。

余ホンチョル専務は「(点数を)付けてくれれば早く入村させよう」と言い、「私たちが副会長と(鎮川)選手村長と少し話をするので、その評価の範囲でこういった数値を付けていただければと思います」と述べた。余専務の発言の後、会議は終了した。その後、承認が保留されていた国家代表選手は全員、鎮川選手村に入村したことが確認された。

ジン・ジョンオ議員室が大韓体操協会から提出された『2025年度第4回女子器械体操競技力向上委員会会議出席署名簿』によると、この日の会議には余ソジョンの母であり、余ホンチョル専務の配偶者である金アムゲ大韓体操協会前監督も出席した。大韓体操協会側は、国家代表選考に関する議論の際、金前監督がすでに席を外していたことを強調したと伝えられている。

体操界のある関係者は「臨機応変に点数だけを数値化して提出しようというのは、既存の選抜名簿を維持するための『事後点数操作』だ」とし、「さらに、余ホンチョル専務は競技力向上委員会に所属していないのに、会議を完全に主導した」と述べた。この関係者は「利益相反を超えて職権乱用にも該当する部分だ」と付け加えた。

国会文化体育観光委員会所属のジン・ジョンオ国民の力議員は「国家代表選考会後に『臨機応変』で評価点数を数値化して提出したという状況が事実であれば、これは選考手続きの公正性と信頼を深刻に損なう

行為だ」とし、「競技力向上委員会の委員ではなく、執行部の役員が会議に出席して議論を主導し、利害関係のある事案に関与したという疑惑も明確な問題だ」と指摘した。

ジン議員は国家代表選抜名簿の承認権限を持つ大韓体育会に関して、「大韓体育会が（利益相反に関する）制度改善に取り組んだことは必ず必要な措置だったが、あまりにも遅すぎた」とし、「国家代表選抜名簿の承認保留後に再度承認を決定した過程が適切だったのか再確認が必要だ」と述べた。彼は「今回の件は関係機関すべての責任の下で、徹底した事実解明と再発防止が行われるべきだ」と強調した。

日曜新聞は「国家代表選考評価点数の事後操作の兆候」に関する問い合わせを目的として、余ホンチョル大韓体操協会専務に何度も連絡を試みた。余専務は連絡に応じなかった。

出典：

https://www.ilyo.co.kr/?ac=article_view&entry_id=507988&fbclid=IwY2xjawQLc7tleHRuA2F1bQIxMQBicm1kETFxZ25tbXVKOEVzcmJGeHFvc3JOYwZhcHBfaWQQMjlyMDM5MTc4ODIwMDg5MgABHrk7Ny39Z2d916M7fBjVMRQM4cEbI7KIA4PfnE_hx6UzD0rCqd1zjm82eB9M_aem_T0nLUo_9SO_Wu9P_tQTilg

02 日刊スポーツ 2026年2月16日

史上最高レベルの内部抗争で、全身がボロボロに … ジャイアンツ野球団が失った5つのこと



家族全員が集まり、次のシーズンのKBOリーグの動向について話し合うべき祝日。ロッテ・ジャイアンツ発の「賭博騒動」が野球ファンに疲労感を与えている。台湾（台南）での第1次スプリングキャンプに参加した金ドンヒョク、羅スンヨプ、高スンミン、金セミンが違法賭博場に入入りし、帰国処分を受けたこと。球団は事態が明らかになった13日に彼らをKBOクリーンベースボールセンターに通報し、「それに相応する措置を講じる」と予告した。

台湾の現地人が4人の選手がいるその店舗のCCTV映像をソーシャルメディア（SNS）に投稿し、国内の野球コミュニティを通じて拡散され、論争が巻き起こった。具体的な状況は調査によってさらに明らかになるだろうが、次のシーズンを準備する時期に出た今回の賭博騒動は、その影響がなかなか収まらないように思える。

ロッテは失ったものが多い。まず、該当選手たちは重い処分が避けられないように見える。違法店舗であるかどうかが免責されるのは難しいように思える。羅スンヨプと高スンミンはそれぞれレギュラーの一塁手・二塁手の1位候補だった。ロッテは朴ジュンヒョク団長が就任した直後に明らかになった所属選手ペ・ヨンビンの飲酒運転の事実に対して「放出」という措置を取ったことがある。今回もKBOクリーンベースボールセンターが下した処分よりも大きな「鉄槌」を下す可能性が高い。羅スンヨプと高スンミンは2024シーズンのチーム野手陣の世代交代を牽引した主役である。

戦力の弱体化はロッテが負担しなければならない事後処理の中で最も小さな部分だ。ロッテは野球ファンの信頼を失った。すでに非活動期間ごとに所属選手の大小の逸脱や私生活の論争で大きな失望感を与えてきた。ロッテは最近8年（2018～2025）連続でポストシーズン（PS）進出に失敗し、創立以来最長の暗黒期に陥っている。希望の歌を歌うスプリングキャンプの期間だったため、「もう一度信じてみる」という

気持ちで選手たちが見せる自信や決意に笑顔を見せるロッテファンが多かった。今回のギャンブル騒動で裏切られた感情は、これまで以上に大きくなった。

ロッテ野球団内の組織の規律が緩んでおり、選手団の管理の実態が明らかになった点で、その打撃はさらに大きいと思われる。金ドンヒョク、羅スンヨプ、高スンミン、金セミンの姿が流出した時間は午前2時と伝えられている。12日は4日目のトレーニング（4日間の練習・1日の休養）が終わった休養日だった。いくら「自由時間」が与えられたとしても、午前2時に宿泊先の外にいたのは一般的ではない。異常な兆候を感知できなかったというだけで、フロントとコーチングスタッフの管理能力が疑われるのは避けられない。KBOは10球団のスプリングキャンプ出発に先立ち、品位を損なう行為が発生しないよう特別な注意を呼びかけ、特に遅い時間のカジノ・パチンコの出入りや飲酒行為を具体的に明示した。

親会社の信頼も失った。金ドンヒョク、羅スンヨプ、高スンミン、金セミンの逸脱行為が明らかになった13日は、2026年ミラノ・コルティナ冬季オリンピックで高校生の崔ガオン（ロッテスキー&スノーボードチーム）が女子ハーフパイプで金メダルを獲得した日だった。スキー・スノーボード種目を長期間支援してきた新東彬ロッテグループ会長が「キダリおじさん」役で浮上し、拍手を受けていた状況だった。しかし、半日も経たないうちに野球チームで美談を覆い隠す「内部攻撃」をしてしまった。

国際的に恥をかいた点もロッテ野球団にとって致命的に作用するだろう。事態が表面化した後、台湾や日本のメディアでも関連内容が取り上げられた。野球コミュニティも盛り上がった。特にジャイアンツは日本プロ野球（NPB）の千葉ロッテと姉妹球団である。所属選手を日本にあるアカデミーに頻繁に派遣している。このような動きにもブレーキがかかる可能性がある。監督やコーチもいない海外で、またどんなことが起こるか分からない。

出典：<https://sports.news.nate.com/view/20260216n04992>

03 ニュース 1 2026年2月15日

選手も、施設も不足しています・・・大田の冬季スポーツの構造的限界が明らかに



イタリアで響き渡る韓国選手たちのメダルのニュースとは裏腹に、大田冬季体育の現状は依然として「インフラの渴望」の中に留まっているとの指摘がある。

2026年第25回ミラノ・コルティナダンペッツォ冬季オリンピックに、韓国は選手71名を含む130名規模の代表団を派遣し、金メダル3個以上、総合順位10位以内への進出を目指すことを掲げた。世界の舞台での活躍が続いているが、今回の代表団名簿には大田出身の選手は一人も含まれていなかった。

地域のスポーツ界はこれを単なる「今回の大会の不在」ではなく、構造的な問題として捉えている。ある関係者は「オリンピックに挑戦できるレベルのエリート選手層が地域に残っていない」とし、「小学生部以降、上級学校に続く育成体制が脆弱で、有望選手が他の地域に流出する悪循環が繰り返されている」と指摘した。

スケート界は不振の最大の原因として劣悪な施設条件を挙げている。大田で国際規格（60m×30m）を備えたアイスリンクは、西区タンバンドン南線公園総合体育館内のアイスリンクだけである。しかし、観客席や付帯施設が不足しているため、全国規模の大会を開催するには限界があるとの評価がある。

この施設は2002年に西区庁が建設し、現在は民間委託で運営されている。スケート施設は冷凍・製氷設備の維持に多額の費用がかかる特殊施設であり、自治区単位での運営には財政的負担が大きいという説明だ。西区庁の関係者は「アイスリンクは予算が多く投入される施設で、自治区のレベルで負担するのは容易ではない」とし、「広域単位のスポーツインフラは市が責任を持って管理・運営する体制が必要だ」と述べた。

大田市体育会のアイススケート連盟のある役員も「南線アイスリンクは規模と施設が不十分で、ショートトラックの全国大会はもちろん、愛好者大会の開催も容易ではない」とし、「全国大会を誘致できる専用アイスリンクの建設が急務だ」と強調した。

訓練環境も改善が必要だという指摘がある。スケートリンクは午前10時から午後6時まで一般市民に開放される。選手のトレーニング時間は午前8時から10時までの1日2時間に過ぎない。この時間さえもショートトラックとフィギュア、一般・アマチュア・エリート選手が分けて使わなければならない。午後8時以降はアイスホッケー選手団が利用する。

経済的な負担も少なくない。南線アイスリンクの1時間のレンタル料は13万ウォン程度で、休日を除いても1ヶ月のトレーニング費用が数百万円に達するというのが関係者の説明だ。このため、一部の選手は果川や牙山など他の地域に遠征トレーニングに出かけている。移動時間と費用の負担が増大する中で、途中で運動を諦めるケースも発生しているとの懸念が出ている。

選手育成の基盤も脆弱だ。現在、大田でスケート部を運営している学校はハンバツ小学校だけで、高校部のスケートチームは存在しない。小学校以降、進路が閉ざされるため、有望な選手たちが首都圏に転校を選ぶことが繰り返されている。これは地域のエリート選手層の崩壊につながっているとの分析がある。

このような構造的な限界は全国冬季体育大会の成績にも表れている。大田選手団は2025年第106回全国冬季体育大会で金メダル1個、銀メダル1個を獲得し、総合で14位に入った。最近数年間、12位から15位の範囲を外れず、一部のメダルは単独出場種目から獲得された。

大田市は2026年全国冬季体育大会に、スケート22名（選手16名・役員6名）、アイスホッケー22名（選手18名・役員4名）、スキー11名（選手7名・役員4名）、カーリング14名（選手10名・役員4名）、山岳7名（選手3名・役員4名）など、5種目で計97名が出場する予定だ。しかし、地域のスポーツ界は「単なる参加人数の拡大よりも重要なのは、競争力のある選手層をどれだけ厚くできるかだ」と指摘している。

専門家たちは、単なる施設の改修を超えて、全国・国際大会を誘致できる専用競技場の新設、初中高連携育成システムの構築、安定した訓練費の支援と長期的な発展計画の策定が並行して行われるべきだと強調している。

出典：<https://www.news1.kr/local/daejeon-chungnam/6073420>

04 韓国生活体育ニュース 2026. 2. 10

“DDP を解体し、'ソウルドーム' を建設すべきだ” … 東大門の文化・体育機能の復元を主張



ソウルの東大門デザインプラザ（DDP）を解体し、その敷地に大規模な複合スポーツ・文化施設である『ソウルドーム』を建設すべきだという主張が提起された。

（社）共にスポーツフォーラムの金テクチョン理事長は最近発表した政策提言で、「東大門運動場の撤去以降、ソウルの中心部の生活型文化・体育機能が断絶された」と述べ、「DDP の解体を含む全面的な再構成を今こそ実行の議題にすべきだ」と明らかにした。

金理事長は「東大門運動場は単なる老朽化した体育施設ではなく、数十年にわたり市民のスポーツ観戦や生活体育、大衆文化が蓄積された空間だった」と述べ、「繰り返しの訪問と経験が積み重なり、都市文化が形成された代表的な場所」と評価した。

東大門運動場は 1925 年に建設され、プロ野球やサッカー、各種全国大会や市民体育イベントが開催されていたソウルの代表的な体育施設だったが、2008 年に取り壊された。その後、同敷地には 2014 年に DDP が開館し、展示・ファッション・デザインを中心とした文化空間として運営されている。

金理事長は DDP について「建築的な象徴性と観光資源としての役割は認める」としながらも、「イベント中心の利用構造のため、市民の日常に深く根付いていない」と指摘した。

彼は「都市を動かす鍵は訪問者数ではなく、常に空間を利用する生活者数だ」とし、「体育と大衆文化という東大門の独自の機能が継承されていないことが最大の問題だ」と述べた。

これに対する代案として、金理事長は DDP の敷地に「ソウルドーム」の建設を提案した。

ソウルドームは、△平日は市民体育・学校競技・地域スポーツ大会、△週末はプロスポーツと大衆公演、△季節ごとの国際イベントや都市祭りを受け入れる複合施設として構想されている。彼は「スポーツと公演、祭りが結合した構造は世代統合、夜間経済の活性化、観光需要の創出につながる」と説明した。

特に「重要なのもう一つの大型建物ではなく、市民が繰り返し訪れ、思い出を蓄積できる生活型文化エンジンを作ることだ」とし、「これを通じて東大門周辺の商業圏や雇用、地域共同体が共に回復できる」と主張した。

金理事長は最近、ソウル市長選挙を前に提起された全ヒョンヒソウル市長候補の「DDP 解体検討」公約について、「単なる賛否の論争ではなく、ソウルの文化的アイデンティティと未来の競争力をどこから再設計するのかという問いだ」と評価した。

彼は「都市の中心は建物ではなく人である」とし、「ソウルがグローバル文化都市として持続的に成長するためには、華やかな展示イベントよりも市民の生活の中で機能する体育と文化の復元が優先されるべきだ」と強調した。

出典：<http://www.kstnews.co.kr/news/articleView.html?idxno=40289>

スポーツ 最高裁判所さえ「ウクライナ追悼、オリンピックでは認められない」



国際スポーツ最高仲裁機関でさえ、オリンピックの舞台でロシアのウクライナ侵攻を間接的にでも批判する行為は不適切だという結論に至った。

14日（韓国時間）AFP通信によると、スポーツ仲裁裁判所（CAS）はウクライナのスケルトン選手、ブラディ斯拉フ・ヘラスケビチが提起した失格処分に関する上訴を棄却した。

ヘラスケビチは2022年のロシア侵攻で死亡したウクライナ選手の写真が刻まれたヘルメットを着用したことで失格処分となった。ヘルメットを外すよう求められたが拒否し、13日間の出場禁止処分を受けた。戦争の犠牲者への追悼と連帯の目的でヘルメットをかぶったというのが彼の説明だが、国際オリンピック委員会（IOC）はこれを政治的スローガンとして受け取った。オリンピック憲章第50条第2項は「いかなる種類のデモや政治的、宗教的、人種的な宣言もオリンピック競技場や施設、その他の地域では許可されない」と規定している。

マティユー・リーブCAS事務局長は「もちろん表現の自由はオリンピックでも保障されるが、競技場は例外だ。これは神聖な原則だ」と一蹴した。

事件の審理を仲介したドイツ人アネット・ロンバッハは「戦争によってウクライナの国民と選手たちが経験した痛みは理解している。これを知らせようとする選手の意図にも全く共感する」としつつも、「そのヘルメットがIOCのガイドラインに違反したのは事実だ」と結論づけた。

ヘラスケビッチは「差別的な決定だ」とし、「真実が明らかになることを願っている。私は無実だ」と即座に反発した。その後、ドイツ・ミュンヘンでウクライナ大統領ヴォロディミル・ゼレンスキーと会談した彼は、失格処分が不当だと訴えた。

追悼目的のヘルメットを着用する試みはヘラスケビッチだけではありません。ウクライナのショートトラック代表オレフ・ハンデイは「英雄主義があるところに最終的な敗北はない」という文が刻まれたヘルメットをかぶろうとしたが、挫折した。ウクライナのフリースタイルスキー選手カテリナ・コチャルも「ウクライナ人のように勇敢であれ」という文言のヘルメットを競技で着用しようとしたが、IOCの判断により中止された。

ただし、ロシアに対する国際社会の批判が厳しいため、これを無条件に禁止することはIOCにとっても政治的な負担が大きい。IOCはトレーニング走行やメディアインタビューの際に追悼ヘルメットを許可するという妥協案を出したこともあった。また、試合中には追悼の意を表す黒い腕章を着用することも提案した。

しかし、ヘラスケビッチはこれを拒否した。カースティ・コヴェントリーIOC委員長は13日に自らヘラスケビッチと会ったが、説得には失敗した。

コヴェントリー委員長は「彼に手続きがどのように進むかを説明する場だった」とし、「規定は規定通りに適用されるしかない」と述べた。

一方、ウクライナ政府はヘラスケビチ選手の愛国心を高く評価し、勲章を授与する方針だ。

出典：<https://www.news1.kr/sports/general-sport/6074079>

体育市民連帯オンライン 定期後援案内

万人が楽しむスポーツ世界、体育市民連帯が共に作ります。
私達連帯の活動に積極的に賛同していただくことを願います。

私たち体育市民連帯は体育人の権益保護と
福祉実現のために努力しています。
皆さんの小さな心づかいがより良い世界のための
体育市民連帯活動に強固な土台となります。
体育市民連帯会員として力になろうと
される方は下の口座に後援お願いします。

国民銀行 086601-04-095940

口座名義：体育市民連帯

オンライン定期後援は下のリンクを通じてホームページからできます。

多くの関心をお願いします。

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 孝寧路 230 スンジョンビル 407 号

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com

週刊ニュースレターバックナンバー（資料室） <http://www.yg.jpn.org/sportscm/index.html>